

簡単な腹膜透析

樋口千恵子*

私が腹膜透析（PD）診療に関わるようになって一番強く感じたことは、PD は患者が自ら治療に関わるため自己コントロールに積極的で、前向きである患者が多いという点である。また、介助が必要な場合は家族が行う場合が多いが、家族は患者の治療現場を知っているため、どのようにケアに関われるかをおのずと考え行動する。血液透析（HD）では患者は治療を受けさせられている感が強く、家族は治療現場にはあまり行かないことが多いので治療への理解が少なく、患者とともに治療に取り組む姿勢は少ないように思う。PD では患者やその家族からこの治療を選んでよかったとの声を聞くことが多いが、HD 患者からそのような声を聞いたことは残念ながらない。このように積極的に治療に取り組み経過の良い患者を見ることは医療者側にとっても大きな喜びであり、とくに実際に教育に関わる看護師は PD に携わるようになると、元気で喜んでいる患者に接し自分たちの仕事の意義を感じる人が多いと思う。しかし、本邦の PD 患者数は減少傾向にあり、日本透析医学会の統計調査では 2009 年の 9,856 人から 2015 年は 9,322 人まで減少している。なぜ本邦では PD 患者は増えないのかという課題については種々の要因が言われているが、未だにその状況は変化していない。

PD を始めるに当たりネックになっているのは、患者や家族が手技を習得しなくてはいけないところ、医療者側にとっては教えなくてはいけないところで、これが面倒だと

* 東京女子医科大学東医療センター内科

思っている人は多いと思う。実際そのとおりであり、PD患者の増えない要因の一つになっていると思われる。PDのバッグ交換は数カ所のクランプを開けたり閉めたりしながら、液をあちらこちらに流さないといけないという複雑な手技が何十年も変わらず続いている。これが非常にわかりにくい。とくに高齢者にとっては最初何が何だかわからず、ただ言われるままに順番で行いながら、時間とともにようやくわかってくる。しかしIT技術も進んできている現在、この煩雑な手技を省き、腹膜カテーテルと透析液バッグを繋いだらボタン一つ押せばすべてのステップを自動でやってくれるPDシステムを開発できるのではないかと思います、いつもメーカーにお願いしている。APDの加温のステップを省き小型化するだけなのですぐできるのではないかと考えているのだが、未だにできてこない。PDは難しいという概念をなくすことにより、PDの良さを多くの患者に提供できるようになるのではと思っている。